

杉並 づるる

つなく ひろがる ささえる

2019年8月発行 vol. 13

- もっとつなごう! 地域の「支えたい」と「支えてほしい」
—住民主体の生活支援活動について語る座談会 1~3 面
- 町会がなければ“住民有志で交流の場づくり”
—宮前まちづくりの会 4 面

もっとつなごう! 地域の「支えたい」と「支えてほしい」

—住民主体の生活支援活動について語る座談会—

生活の困りごとを小回りの利く地域住民が主体となって、家事援助や生活支援を行っている有償ボランティアの活動があります。近年、その需要が高まる一方で、担い手となるサポーターの高齢化や利用者とのマッチングなど、課題も少なくないようです。区内で活動する団体から、一般社団法人困ったときのSOSの小暮久美子さん、「NEKO(ネコ)の手サポート」事業を運営するNPO法人おでかけサービス杉並の樋口蓉子さん、「ちょこっと支え合い」事業の運営の中心メンバーであるNPO法人竹箒の会の橋詰信子さん、の3人に活動の現況・課題・今後の展望について語り合っていました。司会は杉並区社会福祉協議会(以下「社協」)地域支援課地域福祉推進係長で生活支援コーディネーターの中島篤さんです。

“互いに助け合っていこう”の精神

司会 まず、家事援助や生活支援活動を始めたきっかけについてお話しください。

小暮 ケア24(地域包括支援センター)上井草に勤務していたときに、地域の住民に行ったアンケートで、「戸戸が閉められない」、「買い物や掃除ができない」といった困りごとを抱えている方が少なくないことがきっかけです。ケア24上井草を運営する社会福祉法人サンフレンズだけでなく、近隣のケア24、民生委員、社協にも相談して、「困ったときのSOS」を立ち上げました。そのときに掲げたのが「地域に恩送り」という言葉で、人は皆、いろいろな恩恵を受けながら生きているのだから、それを社会に還元しようという理念です。

樋口 私たちは移動サービス事業を運営する中で、利用者の中から「生活していて、こんなことが大変だ」といった声を聞くようになったことから、私たちにできることをしようと考えました。かつては家族や近所同士で助け合っていたようなことがなかなかできなくなってきている時代だから、そういうことを代わりに引き受けようという姿勢です。



橋詰 ケア24高井戸から、「ちょっと支えてもらいたい人と、その程度のことならやってあげたいという人が地域に大勢いるのに、マッチングできていない」という話を聞いたことがきっかけです。ケア24や地域、団地の自治会長、いきいきクラブの会長と話の通じ合えるネットワークができていたので、やるならこのタイミングだと思いました。地域で支え合っていこうという精神を「ちょこっと支え合い」という名前に込めました。

利用者との理念の共有が大事

司会 次に、活動内容や利用者についてご紹介ください。

小暮 活動は、家事援助や外出支援が中心です。家事援助は、作業自体は簡単ですが、個別性が高い。利用者一人ひとりの流儀があるので、それを尊重することが大事です。利用件数は月に50件くらい。2015年の介護保険法改正後は、「定期的に家事



一般社団法人 困ったときのSOS
小暮久美子さん

【事業開始】平成23年4月
【活動内容】屋内の家事援助、水まき、草取り等屋外の清掃、買物支援、通院付添、外出支援、話し相手等

事をしに来てほしい」という利用が増えました。利用者はパンフレットを見て、あるいは口コミで知って連絡してくる人が多いですが、ケアマネジャー（以下「ケアマネ」）に頼まれることもあります。利用するときには会員になってもらい、利用者やサポーターの払う会費が事業を支えています。事業を立ち上げた年に東日本大震災

がありました。貯金を被災地に送りたいから送金を代行して」という依頼を受けて、「そんな依頼があるんだ。それを自分たちが手助けできるんだ」と感激したことは、この活動を続ける大きな弾みになりました。

樋口 利用の内訳は、通院・院内介助が37%、楽しみのための外出が23%です。ほかは、施設内での傾聴がほとんどで38%です。もともとは移動サービスの会員を対象に始めましたが、今はそのサービスの利用がない方でも、会員になれば「NEKOの手」を利用できるようにしました。昨年度は月平均28件の利用で、利用状況は2、3年前と変わっていません。リピーターがほとんどです。新しい方の依頼を引き受けるのが難しくなっているというこちらの事情もあります。

橋詰 私たちのところでは、同行・代行・室内清掃・

屋外清掃の4つが2、3割ずつくらいで支援の大半を占めています。パソコンやスマホのサポートを得意としています。始めた頃は月20~30件程度の依頼でしたが、最近では50~80件くらいになり、今年5月には124件にも増えました。できる限り断りたくないのですが、とても受けきれなくなってきました。ただし、単に安くやってくれる業者だと勘違いして

いる依頼者にはお断りすることもあります。「利用者にもできることがあり、ときにはサポーターになれる」。そんな地域住民同士が相互に助け合うという理念に基づく活動を理解していただけたらうれしいです。

司会 利用する前に会員になってもらおうと、会則などを通して団体の理念が伝わりやすいかもしれません。



NPO法人おでかけサービス杉並
「NEKOの手サポート」
樋口 蓉子さん

【事業開始】平成25年3月
【活動内容】通院付添、外出支援、話し相手、屋内の家事援助、買物支援、屋外の清掃等

やりたい気持ちをつなげるマッチングを

司会 サポーターはどのように集めていますか？

小暮 サポーターは現在16人。運営しているSOSふれあいサロンで、「近所に水撒きをしてほしい人がいるけれど、誰かやってくれないか」などと声をかけたりしています。サロンの中では、お互い様で簡単なことはやってあげようという関係が生まれてきています。ただ、みな高齢者なので、若い人たちに広がらないと、今やっていることがやがて消滅してしまう。子育てサロン「おやこひろば」を開設し、若い世代と交流しながらサポーターとなる人材を求めていきたいと思っています。

樋口 移動サービスの運転協力員やその家族がサポーターになってくれています。登録者は53人いますが、実働は20人程度。相性や適性の問題があり、コーディネートに苦勞しています。よくケアマネや施設から

傾聴を頼まれますが、認知症の方などの場合、その症状に応じたスキルが求められることもあり、「どこまで住民主体の活動で対応すべきなのか」と戸惑うこともあります。

橋詰 東京ホームタウンプロジェクトの支援を受けて作成したチラシを近隣やケア24で配布してサポーターを募集しています。現在、サポーターは31人登録していて、実働は18人くらいです。なかなかマッチングがうまくいかないのが悩みです。依頼しても、「その仕事はできない」と断られたり、サポーターやその家族も高齢化しているので、突発的に都合が悪くなってしまったり。メンバーの充実が喫緊の課題です。

司会 最近では、シニア世代もどんどん働くようになってきたし、共働き家庭も増えています。その中で、隙間の時間を使ってボランティアをしてくれる人は、今後は圧倒的に不足してくるでしょう。これはNPOやボランティア団体にとっての共通の課題ですね。

樋口 忙しい人たちは時間をやりくりしながら協力してくれています。そうした人たちをうまくコーディネートすることができれば、彼らの少しの時間を活動につなげられると思います。

司会 内閣府のアンケート調査では、9割の人が何らかの形で社会に貢献したいと思っているのに、実際に活動しているのは1割という結果が出ています。おっしゃるようにコーディネート工夫して、マッチングをうまくすることでサポーター不足に活路が見いだ



「ちょこっと支え合い」
橋詰 信子さん

【事業開始】平成28年3月
【活動内容】IT機器操作補助、通院付添、屋内の家事援助、屋外の清掃、買物支援、外出支援、話し相手等

せるのではないのでしょうか。

橋詰 コーディネートには相当な労力を要します。そこを理解してもらって、行政からのサポートもほしい。また、人材確保やコーディネート面で協力し合える連合体のようなものが作れたらいいと思います。

司会 事務局機能の強化、スタッフやサポーターへの研修なども必要になってくる

かもしれません。また、「支えられる側」と思われている人たちの力を生かしていく発想もあっていいと思います。皆さんの活動は、地域と接点の持ちづらい人などが、人と関わり、感謝され、自信をつけていく場にもなり得るのではないのでしょうか。



司会の中島 篤さん
(杉並区社会福祉協議会)

活動の広がりを目指して

司会 最後に、今後の展望をお話してください。

橋詰 これからも希望する人がいる限り、誠意を持って丁寧に対応していきたいと思います。活動をもっと広げていくために、コーディネート能力を高めていきたいです。そのために、さまざまな団体と連携して知恵や助言をもらって、成長していけたらと思っています。
小暮 私たちの活動は、利用者が張り合いのある生活を送る力を得るために、本来持っている力を引き出すことが大事な支援だと思っています。ささやかな活動ですが、活動を通して接する中で信頼関係ができ、「一緒にやってみようか」と思う方々を取り込んで、活動を続けられたらいいと思います。

樋口 介護保険などの制度でカバーする範囲、民間企業の提供するサービス、私たちのような地域の住民活動、この3つがうまく絡み合っていくと、暮らしやすい地域になるのだと思います。生活支援の事業もこの絡み合いの中にあり、ケアマネから「自分たちだけではできないところをやってくれる」と評価を受けています。その期待を受けつつ、両者が一緒になってやっていけたらいいと思っています。「私たちが地域をつくっていくんだ」という思いがもっと強く深く浸透していくことを願っています。

司会 利用者もサポーターも地域住民です。「お互い様」の気持ちを持って、みんなが地域のことを考える。そんな支え合う地域づくりの機運を発信していけると良いですね。ありがとうございました。



町会がなければ“住民有志で交流の場づくり”

—宮前まちづくりの会—



杉並区内にはわずかながら町会・自治会がない地域があります。そのうちの一つ、宮前2丁目では、「楽しみながら地元を知ろう!」と学習会や地元歩きなどを企画・開催するグループが動き始めています。平成29年7月に立ち上がった「宮前まちづくりの会」がそれです。会に呼応するかのように今年1月、同地域では防災会も発足しました。

主体的に関われる取組をしたい

宮前2丁目にはかつて町会があったそうですが、現在はありません。「町会がなくても、ご近所付き合いによる交流や情報交換をやってみよう」と立ち上がったのが「宮前まちづくりの会」です。コアメンバーはケア24南荻窪エリアの「あんしん協力員」である佐藤志乃美さん、松崎徳子さん、野間佳子さんの3人。今や「三人娘」と呼ばれています。

「三人娘」のひとり、佐藤さんは、阪神や東日本の大震災でボランティアが活躍しているのを見て、「自分もボランティアでできることはないか」と思い、自宅を開放して「お灸教室」を開きました。「家庭でお灸ができるようになれば、健康維持にもつながるはず」という一念です。松崎さんは婦人相談員の仕事を辞めてから、「何か地域のためにできることはないか」と、あんしん協力員やき



▲「歩いて巡ろう! 野菜直売所ツアー」の様子

ずなサロンの運営メンバーに。野間さんは民生委員として、地域の身近な相談相手として活動してきました。そんな3人をつないだのがケア24南荻窪でした。

「ただ参加するのではなく、もっと主体的に関われるこの地域独自の取り組みを」…が三人娘の方針です。最初は平成29年10月と12月、「自分のトリセツ(取扱説明書)」をテーマに参加者同士で自己紹介をし合いました。以降、「ステキなとの重ね方」、「地元を知ろう! ~宮前の歴史と農業~(講師:島和宏さん)」、「地元を知ろう! ~農業を支える生産者の思い~(講師:原田映史さん)」、「地元野菜を食べよう(講師:小野実さん)」などの企画を重ねています。今年7月3日には「Café ふくろう宮前」(宮前2丁目)で「春日神社の歴史と祭りを知ろう!」をテーマに、春日神社神輿係総代の三田利春さんに話してもらいました。地元人に地元について語ってもらうことを重視しています。



▲熱心に聞き入る参加者たち

防災会も発足

会としては将来、町会ができるのは理想と考えてはいるものの、「町会運営は大変そうだし、そこまで待てない」(松崎さん)というのが本音。それでも昨年11月には「防災を本気で考える~地域で命を守るためにできること~」をテーマに区の防災課から話を聞いたり、防災食づくりを体験する企画を実施したりしました。それが住民の背中を押したのでしょう、今年1月には「防災会」が発足しました。メンバーは役員10人のうち男性8人、女性2人。「防災は男性に頑張ってもらいたい」とエールを送ります。

仲間を増やしたい

会の活動はまだ始まったばかりで、課題は少なくありません。「運営メンバーをもっと増やしたい。特に若い人に加わってほしい」。三人娘の切実な思いです。「今後、どんな企画でやっていくか試行錯誤しながらやっています」(佐藤さん)。それでも、会に参加した人から「地域の歴史や農業などについて発見があり、とても楽しい」などと言われると、また元気が出ます。「活動をするようになったことで、私たち自身が地域のことが分かるようになった。“地域デビュー”です」。少しずつ手ごたえを感じているようです。

一人ひとりの、「自分にできることはないか?」というボランティアの精神がつながり、町会とも地域サロンとも違う独自の取組を目指して、「宮前まちづくりの会」は活動しています。



▲三人娘(左から野間さん、佐藤さん、松崎さん)